漢籍から見る日本の古典籍 ―版本を中心に―

堀川貴司

一、分類

（一）四部分類の理想と現実

日本の古典籍（国書）について、分類をどうするかという問題は長年の懸案である。江戸時代までに定着した分類方法がなかったため、近代以降も試行錯誤が続いている。[1]それに比べると漢籍は、四部分類という『隋書』経籍志以来伝統的な分類方法を持ち、全世界共通に行われている点、大変うらやましく思える。

四部分類とは、以下のように書物を四つにおおきく分類するもので、それぞれの部の中は、さらに部―類―属と分けていく。

経……儒教経典およびその注釈、小学書（文字音韻関係）

史……歴史書（公文書類、伝記、地理等を含む）、目録、金石文

子……思想・軍事・農学・医学・天文・術数（占い）・芸術・類書・小説（異聞・説話的なもの）・仏教・道教

集……別集（個人の詩文集）・総集（アンソロジー）・詩文評・詞曲・小説（明代以降の短編・長編、ただし子部小説類に含める目録もある）

（ほかに叢書類を設けるもの、準漢籍を立てるものもある）

この分類の背景にある思想は、士大夫（読書人）の歴史観・世界観である。[2]

経（もともと縦糸のことで、転じて永続不変のものを指す）を中心に据え、次々と生起する社会的事象を史が記録し、その間の個人の思弁や感懐を集に収める。時代の変化に応じて必要になる知識・技術を子が受け持つ。すなわち、書物（蔵書体系）は彼らの理想的世界の反映であるべきだとするのである。

それに対して、実際の書物の生成を見た場合、このように整然とはしていない。

そもそも経は先秦時代の諸子百家のうち、儒家が独立して出来たもので、その内実は史（書経・春秋・礼記）、集部総集類（詩経）、子部術数類（易経）にまたがっている。

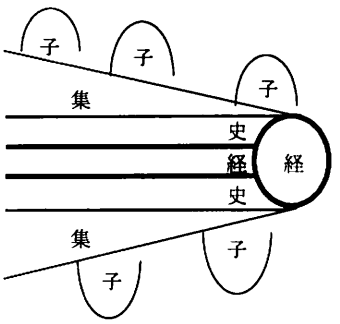
経書は永続不変とは言っても、歴代注釈書の編纂という形でその解釈が時代とともに動いていく。この経部注釈書と主要な史書（およびその注釈書）は、さまざまに改編抄出されて、宋代以降、科挙の受験参考書となる。

これが商業出版における主力商品といってもよい。そのように実用化された書物は、もはや士大夫の精神的支柱としての経書という括り方からは離れた存在ではあるし、その場合、経書か史書かという区別にあまり意味はないのではないか〔図1〕[3]。（図については末尾図版リスト参照）

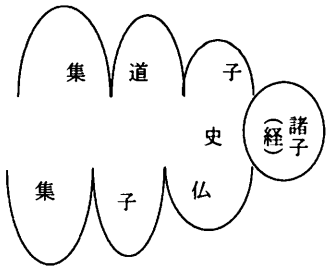
同時代史としての史書は大小さまざまな形で継続的に生成される。個人的な記録になればなるほど、集部との境界はあいまいである。

特に子部・集部は時代に応じて柔軟に変化し、市民社会の進展に伴って通俗的・実用的な書物が増えていく（類書、医書、道教・仏教関係、小説類）。なかでも日用類書と呼ばれる通俗的な百科事典は、四部分類を超越してすべての内容を包含していると言ってもよいものである〔図2〕。

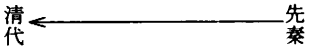
四部分類は、あまりにも整然としたものであるだけに、現実の書物の全体像を見えにくくしてしまっている面がありはしないか。乱暴ではあるが以上のようなことを図式化すると次のようになろうか。



四部分類のイメージ



実際の書物の生成



（二）日本伝来の漢籍と日本古典籍

日本への漢籍の伝来は、六世紀あたりから連綿と途切れることなく続くが、特に大量に輸入され、日本社会に大きな影響を与えた時期が次の三つであろう。

ア　盛唐・中唐（八～九世紀）　遣唐使および留学僧による
イ　南宋・元（一三世紀～一四世紀前半）　禅僧の往来と私貿易による
ウ　明末（一六世紀後半～一七世紀前半）　南蛮貿易・朱印船貿易による

時の権力の性格（仏教に寛容である、貿易統制が強くないなど）と経済活動の活発化とがあいまって、多様な書物が生まれた上記アイウの時期は、偶然にも日中の往来が盛んだったため、それらがそのまま流入した。アでは『日本国見在書目録』や僧侶の将来書目など、イでは五山版の出版や禅僧の将来書目など、ウでは内閣文庫・蓬左文庫・日光天海蔵などの現蔵書によって、そのときどきにもたらされた書物の概要が把握される。そこには中国に現存しない（あるいは意図的に排除された）テキスト（佚存書）や版種が多数見られるが、とりわけ宗教関係書（仏・道）または通俗的・実用的な書物が多く含まれ、それが同時代またはその直後の時代の日本文化にも大きな影響を与えている。

逆に言えば、日本伝来の漢籍（目録や五山版・和刻本にしか痕跡を残していないものも含めて）と、例えば日本古典文学における新たなジャンルの生成（たとえば平安の物語・説話、室町の抄物・御伽草子、近世前期の仮名草子）とをうまく関係づけられれば、それは同時代またはその直前の時代の中国文化の総体を逆照射することになるのではないか[4]。

近年、中国においても「域外漢籍」などの名称で、中国国外所在の漢籍に対する注目が増してきているが、[5]現存するもののみでは不十分（部分的）であって、その全体像は失われた部分の復元を視野に入れなければならない。その手がかりが日本人による書物のなかにあるはずである。

そしてそれは、前節で述べたような伝統的分類を突き崩す力を持つのではないか。

二、構成

（一）封面と刊記

書物の本体（本文）に附属して、その成立事情や内容を伝える序跋、内容の概略を示す目録、版本としての成立を示す刊記、さらには書名・著者名・刊行者名といった最も重要な書誌事項を端的に示す封面（見返しまたは扉）などは、おおよそ南宋の頃、商業出版が盛んになって次第に整えられてきた。

中国版本の刊記は、封面、目録末、各巻首あるいは巻末、本文末など、さまざまな場所に見られる〔図3・4・5〕。それに対して日本の版本（宋元版に近似する五山版を除く）は原則的に本文末に置かれる（奥付）。[6]これは、写本における奥書の伝統が強く保持され、版本にも引き継がれているからではなかろうか。

近世後期、封面を持つ版本が増えてくる。商業出版では奥付の刊記と併用されることが多いが、私的な出版だと封面のみの場合もある。いわゆる唐本仕立ては、表紙（薄手で単色無地）装訂（康熙綴）判型（半紙本あるいは中本で縦長）といった外観のみならず、内部の構成においても中国版本を模倣している〔図6〕。

（二）版式・写式（行字数・匡郭・界線）

竹簡に始まった中国の書物の歴史は、文字を枠の中に収めていくという意識を生み出したように思える。天地に界線を引き、一行ずつ区切る縦の界線も入れて、字数を一定させながら書写していく、巻子本の仏教経典に典型的な様式は、書物の形態が大きく変わっても――文字面が連続していく巻子本・折本から、一定の長さで分割される胡蝶装・包背装・線装（すなわち冊子体）へ――継承され、さらに中心部分の折り目（版心または柱）に魚尾・版心題・丁付などが備わって機能性が高まった。

ただ、仏書以外の漢籍の写本や仏書でも経典本文ではないもの（章疏類）を見る限り、このようにきちんと整ったものばかりではない（そもそも界線のないものも多い）ので、いわゆる散らし書きまではいかなくとも、行数字数が一定しない和文（ひらがな中心の用字によるもの）も、もとを辿ればそのような漢籍に由来するとも考えられる。

鎌倉以降（定家以降といってもよいか）、[7]古典の本文の継承という意識が高まると、冊子体、行数一定、連綿を避け字粒を揃える、といった傾向が生まれてくるようである。それでも匡郭や界線は、一部の歌集（詞書・作者・歌の字高をそれぞれ一定に保つための横線が引かれたもの）や和漢朗詠集の写本の一部（界線あり）[8]を除き普及しない〔図7・8〕。書写時

には何らかの方法で行頭行間を整えてはいても、それを書写面には見せないという美意識があるものか。

近世、これらの写本が版本になっていくとき、古活字版においては一定のピッチに基づき、それぞれの活字の大きさを規定して組むことが行われたが[9]、整版においては特にそのような意識はなさそうである（覆古活字版を除く）。ただし、本居宣長あたりから、国学者の著作を中心に、連綿のない、漢字も仮名もほぼ同一の大きさに揃えたものが出てくる。また、それほど極端でなくても、変体仮名の減少や字形の均一化は版本全体に見られる現象だという[10]。

一方、匡郭については、おおよそ正保・慶安年間（一六四四～五一）を境にして、それまでの、写本通りに印刷する（丁付も綴じ目のなか、あるいは綴じ目付近の目立たないところに記される）という意識から、匡郭や版心を備えたものへと変化していく。近世の代表的な古典出版物について、先行研究を拝借してまとめると、次のようになる。

＊**伊勢物語**　正保五年（一六四八）以前刊が早く、承応三年（一六五四）以降定着。

（関口一美「伊勢物語の整版本」および書誌一覧　山本登朗編『伊勢物語版本集成』竹林舎、二〇一一）

＊**古今和歌集**　承応三年（一六五四）以前刊が早いが、その後も主流は匡郭がない版（覆刻時に匡郭を削除する版もある）。ただし大本ではない判型の場合はほぼ全部匡郭あり。

（川上新一郎「『古今和歌集』版本諸版一覧」「古今和歌集版本考―前稿の補訂をかねて―」「同（続）」「古今和歌集書影集」『斯道文庫論集』一八、三四～三六、一九八二・三、二〇〇〇・二～二〇〇二・二）

＊**和漢朗詠集**　寛永一三年（一六三六）刊が早いが、匡郭のない版も幕末まで続く。その場合、御家流などの書道の手本を兼ねているものが多い）〔図9・10〕。

（『明星大学人文学部日本文化学科所蔵古典籍目録』同科編・発行、二〇一二）

＊**徒然草**　正保二年（一六四五）刊が早いか。寛文年間（一六六一～七二）以降定着。

（高乗勲『徒然草の研究』自治日報社、一九六七）

この変化は、輸入された中国版本と五山版のみでしか見られなかった版式が、近世の商業出版によって広く普及し、書物に関わる人々の目に触れることによって、版本のオーソドックスな姿として認識されるようになったことによるものではないか。

ただし歌集においては匡郭を持たない版面が根強く継承される傾向がある。

また、古典のみならず、同時代作品にも目を向ければ、和歌・連歌・俳諧については同様の意識があるだろう。ただし、俳諧について言えば、標準判型である半紙本より小型のものでは匡郭を持つ場合が多いか（作法書や歳時記など、単なる句集ではないものが多いという理由もあるかもしれない。この点は『古今集』との共通性があろう）。

抄物、仮名法語、仮名草子などについても同様の視点からの考察が可能

であろう。

三、文字

（一）用字（文体）

中国においては文言（古典中国語）と白話（現代中国語）の対立はあっても、書物の形になるものは圧倒的に前者が多く、後者は禅語録や白話小説など、ごく限られた分野のみであるが、日本では、文字の使用がそもそも漢字を借りてきたことに始まるため、漢文による表記がどの程度日本語の独自性を反映するかによって、さまざまな段階の漢文が生まれ、それと平行してカタカナ・ひらがなとの混用もさまざまなバラエティが生じた。この文体・用字の多様性が、それぞれの書物の著者・読者・用途などと絡まり合って複雑な様相を呈しているが、それを解きほぐすことが日本の古典籍の整理研究において、最も重要な課題であろう。

その際に手がかりになるのが、同一テキストで表記が異なるもの（真名本と仮名本、カタカナ交じり文とひらがな交じり文）[11]、漢文における訓点表記の多寡（句点のみ、返り点のみ、返り点・送り仮名・竪点とも表記、など）、ひらがな交じり文における漢字の使用頻度やルビの多寡、などである。

国文学研究資料館の近代文献調査では、ルビの使用状況を書誌事項として記録することにしている（総ルビ・パラルビ・ルビ僅少・ルビなし）が、江戸時代までの書物、特に近世版本についても注意すべきだろう。[12]

（二）字様

楷・行・草といった文字の姿の大枠を書体と呼ぶのに対し、書道でいう書風や書流に当たるような、線の太さや角度、字画の入りや止め・撥ねなどの形態といった微視的な部分に見られる一定の傾向を漢籍書誌学では「字様」と呼ぶ。宋版については、唐代の書家の書風に倣った字様が採用され、出版地それぞれの特徴を持っているとされる。[13]

浙（浙江省、杭州や寧波など）…欧（欧陽詢）―縦横ともすっきりと角張っている。

蜀（四川省、成都など）…顔（顔真卿）―縦画が太く曲線を描き、右上がりが少ない。

閩（福建省、建陽など）…柳（柳公権）―字画の入りが大きく、右上がりが強い。（小字の場合、瘦金体（北宋皇帝徽宗の瘦せて鋭い書風）を取り入れていると言われる）

他に、江西省は三者を兼ねた字様とも言われる。

五山版を見ると、中国禅僧の語録など、多くは浙本に基づくものであるため、欧体が主流であるが、外典など、元代に通俗書を多く出版した閩本に基づくものだと、柳体が見られる。なお、従来それら元代のものは趙松雪体（元の書家趙孟頫の書風に倣ったもの）と言われているが、趙体は字画の入りが穏やかで、全体に柔らかい線であり、柳体とは異なる。[14]これは元明代の政府機関による出版物に多く見られ、朝鮮銅活字本の字様に継承されたとみるのがよいだろう。

明代には、一六世紀なかば、嘉靖年間（一五二二～六六）に欧体をほぼ

正方形に近づけた字形を持つものが多くなり、これに顔体の線質を加えて、万暦年間（一五七三〜一六一九）いわゆる明朝体（中国では宋体、あるいは方匠体などと言う）が完成する。清代に入るとこれがやや縦長のスリムな姿になるが、全体の雰囲気は継承され、版本における主流の字様となる。ただし一方で、明朝体に依らない、手書きの書体を模したものも継続しており、これらは写刻体という。

明朝体の発明は、版本の文字が手書き文字から離脱して、版面においていかに見やすいか、また板刻においていかに効率的に彫れるか、という両方を追求した結果であろう。これが、近代以降西洋のタイポグラフィーの影響を受けながら洗練され、現代の書物や画面上の文字にまで継承されている。

日本の版本について言えば、春日版・高野版等古版本の肉太な字様などが源流として存在し〔図11〕、五山版経由の欧〔図12〕・柳が加わり（顔は皆無と言ってよい〔図13〕）、江戸初期、古活字版経由の趙〔図14〕が広がって、これらが整版本に継承され、そこにやや遅れて明朝体が加わることになる〔図15・16〕。広く普及するのは黄檗版（鉄眼版大蔵経を含む、臨済宗黄檗派による出版）が流布する一七世紀半ばか。[15]

ただ、稿者の専門である日本漢詩文集を見ていくと、一七世紀後半に欧とも明朝ともつかない独特のやや肉太の字様〔図17〕が出てきたり、一八世紀半ばには全体に細い線で右上がりがあまりない、やや稚拙と言ってもよいような字様が主流だったり〔図18〕と、独自の展開があり、さらに一九世紀に入ると清版の影響で繊細な明朝体や写刻体が生まれるなど、実に多様である。和刻本ではもとになる中国版本の字様が踏襲されるのに対し、オリジナルの漢詩文集だと著者の好みや版下筆耕の個性が出るのだろう。ただ、そうでない例を探すことも含め、このあたりの整理も、漢籍書誌学を見習うべき課題である。

（三）欠筆（欠画）

中国では皇帝およびその父祖の諱の文字を避ける風習があるが、これが版本においても守られたのが宋・明末・清の時代で、同義の文字で置き換えるなどのほか、広く行われたのが、該当する文字の最終画（またはそれに近い画）を記さない、というやり方である。[16]

たとえば「玄」は清の康熙帝の諱の一字だったため、『康熙字典』では最後の点を欠いた字を用いているが、日本の近代活字は同書を規範としたため、明治・大正期の出版物には最後の点のない字が見られる、といった思いがけない影響がある。[17]

日本で意識的に欠筆を行ったのは江戸後期から明治のごく初期までである（ほかにもあるかもしれない）。[18] 特に光格天皇の諱「兼仁」の兼字最終画を欠く版本・写本はよく見られる〔図19・20〕。[19]

宋版における欠筆が刊行年代を定める手がかりとして広く用いられているように、ごく限定された時期のみではあるが、これらも刊・写年代の判定に利用できる。ただし、管見の範囲では、版本の場合版元あるいは著者が、写本の場合書写者が、国学者系統あるいは尊皇思想の持ち主である、といった場合に多く、遵守された範囲は限定的であったか。しかしそれも

逆に、彼らの意識を反映している現象として注目すべきだろう。

おわりに

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫という、日本の古典籍と漢籍とをともに研究する機関に所属して三年、建仁寺両足院・陽明文庫に毎年定期的に調査に通い、昨年度始まった科学研究費補助金・基盤研究（A）（代表・住吉朋彦氏）による宮内庁書陵部所蔵漢籍の調査にも参加、ほかに在外日本漢籍調査という佐藤道生氏の科研（一昨年度終了）では大英図書館・ハーバード大学燕京図書館・コロンビア大学東アジア図書館・カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館などにおいて、日本から渡った漢籍の調査にも関わった。乏しい知見ではあるが、それらを思い返しながら、漢籍との比較という視点から、日本の古典籍の研究に資するようなポイントを挙げてみた。

ただ、最初に述べたように、国書と漢籍を比較検討することは、漢籍の研究においても有益であろう。その点、国文学研究資料館においても、和刻本や宋元版を視野に入れて、国内外の漢籍研究との交流が行われているのは心強い。

今回は稿者の知識と準備が足りず、きちんとした裏付けのないまま見通しを述べたところも多い。一つの仮説、あるいは提案として受け止めて頂き、今後の調査の中で検証して頂ければ幸いである。

注

（1）科学研究費補助金基盤研究（A）「日本古典籍分類概念表の確立と古典籍総合目録データベースにおける分類化促進」（研究課題番号16202004、代表・鈴木淳）の研究会において、長らく和本分類の規範となっていた『内閣文庫国書分類目録』の見直しが行われ、その中で、江戸時代の板本について、当時の出版書籍目録の分類を参照すべきだとの意見が出たように記憶している。

（2）金文京「中国目録学史上における子部の意義―六朝期目録の再検討―」（『斯道文庫論集』三三、一九九九・二）は、四部分類ではない中国歴代目録を概観した上で、六朝期に中国社会が上層と下層に分裂し、四部分類が上層すなわち士大夫の世界観に基づくもの、その他の分類は実用的・技術的な書物（四部でいう子部）を重視している、いわば下層を含んだ現実を反映している、とする。宋代以降の出版のうち、民間の営利出版本はまさにそれであるとも指摘している。本稿はこの論に多くを負っている。

（3）井上進『明清学術変遷史』（平凡社、二〇一一）所収「六経皆史説の系譜」は、明清代における「六経皆史説」、すなわち五経（および失われた楽記）はすべて史書とみなす学説を追究している。経と史の境界を無化し、経の絶対的権威を否定するもので、最終的には清朝考証学の一到達点と言え、本稿で言うような実用書の無境界性とは別次元の問題ではあるが、根柢ではつながっているだろう。

（4）書物を直接扱ったものではないが、金文京『漢文と東アジア―訓読の文化圏』（岩波新書一二六二、岩波書店、二〇一〇）が示唆的である。また、これは主として中世に限定してのものだが、島尾新編『東アジアのなかの五山文化』（東アジア海域に漕ぎだす第四巻、東京大学出版会、二〇一四）は、五山に代表される中世禅宗文化をそのような視点から掘り起こしている。

（5）堀川貴司「書評　張伯偉著『作爲方法的漢文化圏』」（『中国文学報』八二、

二〇一二・四）を参照されたい。

（6）巻末別丁に独立させる形で定着するのは享保七年（一七二二）の触書以降であろうかとされる（中野三敏『書誌学談義　江戸の板本』第六章、岩波書店、一九九五、二〇一〇新装版）が、本文末（跋文等がある場合はその末尾）に置かれる傾向は江戸初期からあろう。

（7）定家の書写・造本意識については、浅田徹「『下官集』の定家―差異と自己―」（『国文学研究資料館紀要』二七、二〇〇一・三）が一部言及し、小川剛生『中世の書物と学問』（日本史リブレット七八、山川出版社、二〇〇九）が宋版の影響を指摘、国書の古典化を論じている。

（8）近年、田中登氏は『和漢朗詠集』古写本を罫線の有無に注目して四分類し、それぞれ平安中期・後期、鎌倉前期・中期書写に対応するとの考えを示した（『東西学術研究所紀要』四六、二〇一三・四、二六八頁の個別研究報告書「和漢兼作時代の和歌と東アジア」の概要報告による）。

（9）鈴木広光「嵯峨本『伊勢物語』の活字と組版」（『近世文芸』八四、二〇〇六・七）は、表題の書の組版活字が一定のピッチに基づき作られていることを実証する。

（10）矢田勉「近世整版印刷書体における平仮名字形の変化」（『国語文字・表記史の研究』汲古書院、二〇一二）は、濱田啓介氏の先駆的研究（「板行の仮名字体―その収斂的傾向について」『近世文学・伝達と様式に関する研究』京都大学学術出版会、二〇一〇）を踏まえたもの。氏は字様に当たるものを「書体」、特に規格化されることを「フォント化」と呼んでいる。同書には鈴屋・気吹舎出版物の分析、定家の書写意識についての論も収める。

（11）カタカナ本・ひらがな本の差異を扱った近年の論考に、今西祐一郎「「絵入り本」と文字」（国文学研究資料館編『アメリカに渡った物語絵　絵巻・屏風・絵本』（ぺりかん社、二〇一三）がある。

（12）屋名池誠「「総ルビ」の時代―日本語表記の十九世紀―」（『文学』隔月刊、一〇―六、二〇〇九・一一）は、総ルビの文章はルビ部分を含めた仮名が本行で、漢字は語の切れ目を表示する役割に過ぎない、とし、その源流は、ほとんど漢字を用いなかった平安以来の仮名文学に発し、直接には比較的漢字を多く用いるようになる仮名草子において発生した、と指摘する。

（13）植谷忠雄「漢籍のもう一つの見方」（一）～（三）（東京大学附属図書館月報『図書館の窓』一六―七～九、一九七七・七～九）は、漢籍の字様について宋代から清代まで概観する。著者は東洋文化研究所図書掛長を長年勤めた方。また、陳先行「宋版の字様と版本の鑑定」（原題「宋版的字体与版本鑑定」、中国では字様のことも「字体」と言う）（田中有紀訳、『シンポジウム古典籍の形態・図像と本文』国文学研究資料館、二〇一一）は、宋版の字様について、現存諸本の画像を交えて詳しく述べる。著者は上海図書館の研究館員で、宋版を中心とする漢籍版本研究の第一人者。なお、高橋智『書誌学のすすめ　中国の愛書文化に学ぶ』（東方選書四〇、東方書店、二〇一〇）にも網羅的な言及がある。

（14）住吉朋彦「宋元版の字様」（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『図説書誌学　古典籍を学ぶ』勉誠出版、二〇一一）は、元版のいわゆる趙体は趙体にあらず、柳体の変形だとする。

（15）元禄一〇年（一六九七）刊『無量壽経優婆提舎願生偈註』は、本文を明朝体、注を写刻体にすることで区別している。明朝体を経典の標準字様と意識していたことの表れであろう。また聖護院宮蔵版、嘉永三年（一八五〇）刊木活字版『唐鑑』には、同宮旧蔵の活字で足りないものを新たに作ったとの記述が前付にあるが、明朝体の旧蔵活字を「佛典字」、写刻体の新補活字を「明朝様」と呼んでいる。幕末ではあるが、明朝体が黄檗版によって普及したことの傍証であろう。なお同書のことは古書画店「北さん堂」のホームページに

より知った（http://the-man.info/1408、二〇一三年九月一六日閲覧）

（16）米山寅太郎『図説中国印刷史』（汲古選書四〇、汲古書院、二〇〇五）には、静嘉堂文庫編『静嘉堂文庫宋元版図録』（汲古書院、一九九二）所収宋版に見える欠筆の一覧を収める。

（17）文化庁文化部国語課編『明朝体活字字形一覧』（上）（文化庁、一九九九）によると、たとえば「玄」は、東京築地活版製作所の築地三号（一九三五年）に至るまで欠筆の字形が残存していたことがわかる。（米谷隆史氏の御教示による）

（18）豊田国夫『名前の禁忌習俗』（講談社学芸文庫八四七、一九八八）は、『二条家番所日記』文政元年（一八一八）五月一八日条ほか、史料に基づき欠筆の開始（文政元年）から終了（明治六年）までを記す。

（19）高田信敬「『東湖遺唸』の「闕畫」―山田俊雄先生に―」（『鶴見日本文学』一三、二〇〇九・三）は、表題の書ほか、幕末明治初期の刊本写本の欠筆の実例を列挙する。同「慶応版『神皇正統記』について―闕画の裾野―」（『鶴見日本文学会報』七三、二〇一三・一〇）は行書体の場合闕かない例を挙げるなど考察を深めている。管見では図版19・20に加え、他に『眺望集』（文政八年（一八二五）京都刊）の「今川氏兼」の「兼」、『星巌集』（天保一二年（一八四一）大坂刊か）甲集巻二・九オに「英」（後桃園天皇の諱）、同丁集巻四・六ウに「兼」の欠筆を見出した。

〔付記〕

本稿は、国文学文献資料調査員会議（二〇一三年六月六日　国文学研究資料館）における講演内容を、当日配布した資料に基づいてまとめたものである。図版は20を除き削除しているので、ここに配付資料のリストのみ掲げる（解説は一部書き改めた）。比較的入手しやすい出版物を用いたので、興味のある方はそれぞれの出典を御参照頂きたい。

＊図版リスト

1　新編四六必用方輿勝覧　嘉熙三年（一二三九）序刊（宮内庁書陵部蔵、『日本宮内庁書陵部蔵宋元版漢籍影印叢書』第一輯、北京・線装書局、二〇〇一）
地理書に名所旧跡の詩文を付加した類書。書名の「四六必用」とは、科挙の答案で用いられる四六文（対句中心の装飾的文体）に役立つ、との宣伝文句である。

2　新鍥全補天下四民利用便観五車抜錦　万暦二五年（一五九七）刊（東京大学東洋文化研究所仁井田文庫蔵、『中国日用類書集成』一、汲古書院、一九九九）
天文以下三三門に分けて、自然・地理・法律・書簡用語・冠婚葬祭・書画・医学・占い・趣味・遊興など生活全般にわたって記された百科事典。

3　史記　黄善夫本　紹熙・慶元（一一九〇～一二〇〇）頃刊（国立歴史民俗博物館蔵、古典研究会叢書漢籍之部一七『史記』（一）、汲古書院、一九九六）
集解・索隠・正義という唐代の三種の注釈書を合体させたもの。それぞれの序文を再録していて、そのうちの集解の序文末尾に「建安黄善夫刊／于家塾之敬室」という刊記が記される。

4　（図2に同じ）
最終巻末に蓮牌木記がある。明末の版本の場合は本の末尾が多いか。とすると、そこからの影響も考慮する必要があるか。

5　勅修百丈清規　〔南北朝末室町初〕覆文和五年（一三五六）刊本（米国議会図書館蔵、住吉朋彦「米国議会図書館蔵日本伝来漢籍目録解題長編」『斯道文庫論集』四一、二〇〇七・二に書影あり）
後ろから二番目の跋文末尾、彫り残しの部分に陰刻で文和五年の刊記がある。図3のように、序跋などの余白を利用した刊記の記載であろう。五山版はこのような点も宋元版を継承していることがわかる。なお、『米国議会図書館蔵日本古典籍目録』（八木書店、二〇〇三）はこの刊記について記述せず、版種不明のまま

にしている。

6　金詩佳絶　天保八年（一八三七）刊（長沢規矩也蔵、現在関西大学図書館蔵、『和刻本漢詩集成』総集篇一〇、汲古書院、一九七九）
江戸後期の漢詩人宮沢雲山・守邨鴎嶼編による金代の詩のアンソロジー。見返に編者名・書名・蔵板者名（玉山堂）を三行に並べ、上欄右から「天／保／丁／酉／刊」と記す、この時期の典型的なスタイル。末尾には須原屋茂兵衛と山城屋佐兵衛（玉山堂）の連名の刊記がある。

7　類聚歌合（元永元年十月二日内大臣忠通歌合）断簡（国文学研究資料館九九―一三三―一、同展示図録『古筆のたのしみ』二〇一二）
天に二本、地に一本の界線がある形式。

8　同（某年秋朱雀院女郎花合）断簡（同右一七―六、同右）
こちらは天地一本ずつと、縦界があり、和歌は一首二行書を一つの界幅に収める。
注（8）田中氏論によると、この形式の『和漢朗詠集』は鎌倉前期書写と認定されるとのことだが（管見でも鎌倉時代の写本に多い）、このように歌合写本では平安後期から用いられている。

9　和漢朗詠集　寛永一三年（一六三六）刊（明星大学人文学部日本文化学科蔵、『明星大学人文学部日本文化学科所蔵古典籍目録』同科編・発行、二〇一二）
四周単辺の匡郭を持つ早い例。

10　同　元禄五年（一六九二）刊（同右、同右）
匡郭がない。外題角書に「尊円」とある、いわゆる御家流の手本。

11　大般若波羅蜜多経　巻第一百七　貞応・嘉禄（一二二二～二六）刊　春日版（慶應義塾図書館蔵、白石克執筆『慶應義塾図書館蔵　日本古刊本図録』上、慶應義塾大学三田メディアセンター、一九九五）
五山版や泉涌寺版等の一部の律宗関係出版書を除く、室町までの古版本に共通する肉太の字様を示す。

12　兀庵和尚語録　〔鎌倉末〕刊　（建仁寺両足院蔵、川瀬一馬『五山版の研究』ＡＢＡＪ、一九七〇）
刊行時、中国は既に元代であるが、欧体宋版本の字様をよく伝える。中国の中心的な禅宗寺院は浙江に集まっているため、それらを模した初期の五山版は欧体が中心であるが、南北朝に入ると、通俗的な書物の覆刻も多くなり、福建の字様を持つものが増える。

13　首楞厳経義海　乾道八年（一一七二）刊　東禅寺版（称名寺蔵、神奈川県立金沢文庫保管、同展示図録『唐物と宋版一切経』一九九八）
東禅寺版は福建にある東禅寺で刊行された宋版一切経の一つで、北宋後半の出版だが、南宋まで補刻が行われ、一部に顔体の字様を持つものがある。中世日本で顔体の漢籍といえばこれであったろう。

14　白氏文集　元和四年（一六一八）刊　那波本（宮内庁書陵部蔵、下定雅弘・神鷹徳治編『宮内庁所蔵　那波本白氏文集』勉誠出版、二〇一二）
朝鮮銅活字本に基づき刊行された古活字版。朝鮮銅活字はたびたび改鋳され、それぞれに字様が異なるが、左右の払いが伸びやかで、転折が丸みを帯びている点は多く共通しており、その点で趙体を継承していると見てよいだろう。

15　白氏長慶集　万暦（一五七三～一六一九）刊（斯道文庫蔵、浜野文庫/38A/4-4 1ｐ/10）
まだ縦線のふくらみが少なく、嘉靖年間の雰囲気を残す字様。

16　同　明暦三年（一六五七）刊（長沢規矩也蔵、現在関西大学図書館蔵、『和刻本漢詩集成』九、汲古書院、一九七四）
15の覆刻。界線を削り、訓点を付している、典型的な和刻本。字様は、15よりやや穏やかで、欧体に基づく五山版などに近い雰囲気を持つ。

17　艸山集　延宝二年（一六七四）刊（国立公文書館蔵、『詩集日本漢詩』一三、汲古書院、一九八八）

縦が太く、横が細い点は明朝体に似ているが、やや右上がりで行書体的な部分も残し、全体には写刻体に見える。言ってみれば「唐様」であろうか。

18　南海先生文集　天明四年（一七八四）刊（中村幸彦蔵、現在関西大学図書館蔵、『詩集日本漢詩』一、汲古書院、一九八七）

柔らかな線でほぼ正方形の字形、右上がりが少ない。本書の字様は比較的整っている方で、詩作便覧書などにはもっと稚拙な印象を与える字様が見られる。

敢招、當召字固ヘ二字改作蓋可
乃字従置不反上可

氣作神兼作又可

分無敢招我令試理固
其意而受領焉不反
西行風氣高邁兼善雅詠

19　群書類従　巻第二百二十五　詩歌合（文明十五年正月十三日）（斯道文庫寄託センチュリー文化財団蔵）

五九ウ四行目五十二番左の作者「卜部兼致」の「兼」を欠筆にしている。

20　大東世語　寛延三年（一七五〇）刊（堀川貴司蔵）

上欄書き入れ四行目「兼」を欠筆にしている（版本は欠筆でない）。